

# 「落花生」生育情報（第1報）

～ 基本技術を励行して収量増加！ ～

令和2年7月20日  
千葉県農林水産部  
生産振興課

※本資料は、落花生生産者へ落花生の生育情報を提供するものです。  
調査時点での生育状況をまとめたものであり、本年の収量を保証するものではありません。

## 1 生育状況

は種時期の5月下旬から6月上旬にかけて、気温が高めに推移し、晴れた日も多く、発芽や発芽直後の生育は順調に推移しました。しかし、6月下旬以降は、日照時間は少なく、降水量が多くなっています。

作況調査ほ及び落花生研究室のほ場では、各品種とも、最長分枝長は平年より長くなっていますが、地上部乾物重はやや軽くなっています。なお、開花までの日数は、各品種とも平年並ですが、遅播（6月以降）ではやや早くなっています。

表1 作況調査成績（7月10日調査）※対比は日数、又は平年比

品種名	年次	は種日	最長分枝長 (cm)	地上部乾物重 (g/m <sup>2</sup> )
千葉半立	本年	5月30日	16.0	52.0
	平年	5月30日	13.9	67.6
	対比	同じ	117%	77%
ナカテユタカ	本年	5月26日	16.2	100.5
	平年	5月24日	15.8	104.8
	対比	2日遅い	103%	96%
おおまさり	本年	5月29日	22.1	60.6
	平年	5月26日	21.8	80.7
	対比	3日早い	101%	75%
Qなつつ (千葉P114号)	本年	6月2日	14.0	38.0
	平年	6月3日	13.5	67.2
	対比	1日早い	104%	57%

\* 本年値は、各調査地点の平均値。「千葉半立」は千葉・印旛・香取地区、「ナカテユタカ」は千葉・海匝・君津地区、「おおまさり」は千葉・印旛・君津地区、「Qなつつ（千葉P114号）」は千葉・印旛・香取・長生地区。

\* 平年値は、平成25年から令和元年（過去7年間）の調査データから最大・最小を除く平均。ただし、「Qなつつ（千葉P114号）」のみ平成28年から令和元年（4年間）の平均。

\* 対比はラウンド処理をしているため、小数点以下が合わない場合がある。

表2 (参考) 落花生研究室(八街市)の作況(本年の値、7月10日調査)

	品種名	開花期	最長分枝長(cm)	地上部乾物重(g/m <sup>2</sup> )
標播 (5月20日播種)	千葉半立	6月30日(1日遅い)	20.6(114%)	108.7(98%)
	ナカテユタカ	6月28日(1日遅い)	17.8(101%)	97.4(85%)
	おおまさり	6月26日(同じ)	28.8(99%)	81.5(98%)
	Qなっつ (千葉P114号)	6月29日(1日遅い)	18.4(101%)	99.5(86%)
晩播 (6月8日播種)	千葉半立	7月12日(2日早い)	12.1(119%)	32.3(119%)
	ナカテユタカ	7月10日(3日早い)	10.5(106%)	27.7(96%)
	おおまさり	7月10日(3日早い)	14.2(104%)	17.9(85%)
	Qなっつ (千葉P114号)	7月12日(2日早い)	10.5(111%)	21.5(75%)

\*落花生研究室の4品種の栽植密度は、「千葉半立」、「ナカテユタカ」、「Qなっつ(千葉P114号)」は5,128株/10a、「おおまさり」は2,564株/10a。

注)カッコ内は、平成28~令和元年の平均値対比を示す。

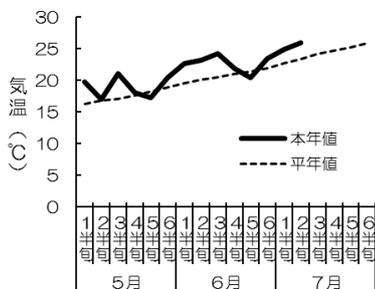


図1 気温の推移(アメダス、佐倉)

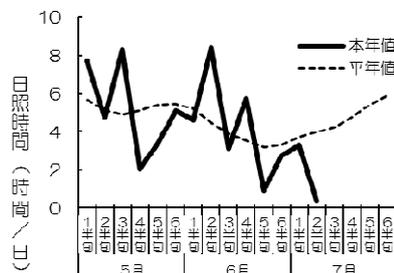


図2 日照時間の推移(アメダス、佐倉)

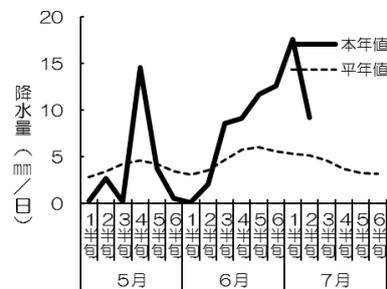


図3 降水量の推移(アメダス、佐倉)

## 2 これからの管理のポイント

### (1) 十分なかん水を行いましょ

7月中旬~8月上旬は、落花生の子房柄が伸長して地中で莢が肥大する時期です。この時期に干ばつ害を受けると、空莢や未熟粒が発生し、収量が大きく減少します。

また、8月上旬以降に干ばつに遭うと、幼芽褐変症が発生しやすくなり、種子に発芽障害が生じます。そのため、

- 開花期後20日頃から、週1回を目安にかん水し、  
採種する場合は、開花期後40日頃にもかん水しましょう。
- 1回のかん水量は、30ミリ以上の「十分なかん水」を心がけましょう。

(参考)

開花期後20日にかん水すると、稔実率が上がる。



図 開花期後のかん水有無の違いによる子実の状況(平成27年千葉県農林総合研究センター)(ガラスハウス内枠ほ場での調査結果、開花期後40日の子実の状況)

### 3 病害虫の早期発見・早期防除を徹底しよう！

(※) 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍率、収穫前日数、総使用回数などが定められています。ラベルをよく読んで、適正に使用しましょう。

**「茎腐病」** 茎の地ぎわ部が腐り、地上部がしおれ、やがて枯死します。発生が認められたときは、ほ場には**トップジンM水和剤、ベンレート水和剤**を散布し、被害株はすぐに抜き取り、表土と一緒にほ場から持ち出し処分しましょう。



薬剤名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数
トップジンM水和剤	1500倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内
ベンレート水和剤	2000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内

**「白絹病」** 高温・多湿条件下で発生しやすく、地ぎわ部が侵され白い菌糸が密生し、やがて発育不良となり、枯死します。例年発病するほ場では、**フロンサイド粉剤**を株元に散布しましょう。発病した場合は、被害株をすぐに抜き取り、表土と一緒にほ場から持ち出します。



薬剤名	使用量	使用時期	使用回数
フロンサイド粉剤	20kg/10a	収穫45日前まで	1回

**「褐斑病」** 葉に円形の斑点ができる病気で、病状が進行すると落葉します。本病は発生初期の薬剤防除効果が高いので、発生が見られたら早期に**トップジンM水和剤、ベンレート水和剤**等の薬剤を散布しましょう。今年は発生が多くなっていますので、注意しましょう。



薬剤名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数
トップジンM水和剤	1500～2000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内
ベンレート水和剤	2000～3000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内

**茎腐病・白絹病は、連作を避け、他作物と輪作して、被害の軽減に努めましょう！**